



中国の大学受験事情

中国では官僚を採用選抜するため、「科挙」という厳しい受験制度がありました。その伝統を受け継いだのか、現代の中国でも大学受験ともなると、かなり熾烈な受験戦争が繰り広げられています。

今回は、その辺の事情をご紹介します。

中国は23省、4直轄市、2特別行政区、5民族自治区で構成されています。

- ◇ 省は行政区画の最上級単位で中央に直属、
- ◇ 直轄市は北京、上海、天津、重慶の4市、
- ◇ 特別行政区は香港とマカオ、
- ◇ 民族自治区は広西チワン族自治区、内モンゴル自治区、チベット自治区、新疆ウイグル自治区、寧夏回族自治区の5民族自治区です。



将来を開くための大学受験ですが、入り口に達するまでに出身地方地域による格差もあるのです。都市の学生も地方の学生も受験は同様にできますが、信じがたいことに合格できる基準点に出身地域によって大きな格差があるのです。

2016年の北京大学の理科の合格点（一部の行政区画）を見てみましょう。

行政区画	理科合格点
北京市	678
湖南省	679
新疆ウイグル自治区	681
広西チワン族自治区	683
内モンゴル自治区	686
遼寧省	687
黒龍江省	688
吉林省	692
湖北省	693
四川省	695
山東省	700
重慶市	700
雲南省	701
河北省	711
浙江省	734
海南省	873

北京市の 678 点と海南省の 873 点を比較してみてください。その差、なんと 195 点。

実は 2016 年において、教育部（日本の文部科学省に相当）の試験センターで作成した試験問題が 4 種類あり、その他に北京市、天津市、上海市、浙江省、江蘇省各自で作成した試験問題も 5 種類あり、合計 9 種類の試験問題がありました。当然どこで受験するかで試験の難易度が異なり、上記の差が出てくると思われます。

また、学歴社会の中国では、若者が有名大学に憧れて特定の大学に集中するため、あらかじめ出身地域ごとの合格者数を決めざるを得ないのです。そのため、上表のように合格点も地域ごとに違って来るそうです。

このように、現代の中国では、地方出身の受験生が都会の希望大学に入学するのはなかなか容易ではありません。

そうした状況も相まって近年中国では、出身地や合格者割り当て枠などの規制に束縛されず、日本の日本語学校に1～2年間通い日本語力を磨きながら、日本の大学・大学院を目指そうとする若者が増えてきました。

その傾向は統計上にも顕著に表れています。日本学生支援機構の2016年度の統計によりますと、日本における中国人留学生は98,483人。その割合は、日本に来る留学生全体の総数の41.2%を占めています。

そのニーズに合わせ、大学受験に特化した専門学校も増えています。東京にある行知学園（こうちがくえん）という日本語学校では、先生方は中国語で数学などの科目を教え、生徒は日本語でメモを取っているそうです。もちろん希望校や専攻に合わせ、個別指導もきちんと行われるそうです。その結果、名門大学への合格率はかなり高く、国立では東京大学、京都大学、大阪大学、一橋大学、私立では早稲田大学、慶応大学、明治大学、上智大学などの有名大学に進学をしています。

自由に公平に勉学できる環境があるのは素晴らしいことです。若いうちから海外で学ぶことで、自ずと視野が広がり心も豊かになっていくことでしょう。日本で学ぶ中国の優秀な学生たちは将来日中関係やアジアの発展に大きく寄与してくれるはずです。日中の友好の懸け橋になる若者が続々輩出してくれることを願って止みません。

